

抗がん剤調製時の閉鎖式器具の全面使用による経済効果と安全性の向上

○藤原 未都菜¹⁾、逸見 結衣¹⁾、伊勢原 祐子¹⁾、村田 和歌子²⁾、井上 智恵¹⁾、日生下 美紀¹⁾、石田 達彦³⁾、西窪 奈津子¹⁾

1) 兵庫県立西宮病院 薬剤部 2) 兵庫県立加古川医療センター 薬剤部 3) 兵庫県立淡路医療センター 薬剤部

【目的】「がん薬物療法における職業性曝露ガイドライン 2019 年版」が発刊され、全ての Hazardous Drug の調製に対し BD ファシール™ 閉鎖式薬物移送システム(以下、CSTD)の使用が強く推奨されている。当院では、全ての抗がん剤において閉鎖式投与ルートを使用していたが、調製については揮発性抗がん剤のみ CSTD を使用していた。2020 年 7 月中旬より、がん化学療法を対象に、原則全ての抗がん剤において CSTD の使用を開始した。今回、CSTD の使用による経済効果について調査を行ったので報告する。

【方法】2019 年 12 月 1 日～31 日(31 日間)に実施されたがん化学療法 474 件及び、CSTD 使用拡大後の 2020 年 12 月 1 日～31 日(31 日間)に実施されたがん化学療法 446 件のうち、無菌製剤処理量 1 のイ及びロの算定件数の内訳をそれぞれ調査し、診療報酬の収益を算出し比較した。

【結果】2019 年 12 月の無菌製剤処理量 1(473 件)は、イ(180 点)の算定件数が 34 件(7.2%)、ロ(45 点)が算定件数は 439 件(92.8%)であり、診療報酬の収益は 258,750 円であった。2020 年 12 月の無菌製剤処理量 1(428 件)のうち、イ(180 点)の算定件数は 428 件(100.0%)であり、診療報酬の収益は 770,400 円であった。

【考察】 covid-19 の影響によりがん化学療法患者数は減少したが、今回の CSTD 使用拡大により、診療報酬の収益は大幅に増加した。材料費については、コスト試算を行い、病院の負担を極力抑えて曝露対策を行うことができた。安全性については、注射針の穿刺部からの液漏れが生じなくなり、曝露リスクが低下した。また、針刺し事故がなくなり、より安全な調製が可能となった。しかし、デバイス準備に時間がかかることや、デバイスの特性上の観点から全ての抗がん剤での使用拡大には至っておらず、廃棄物の増加も課題となる。今後、より安全な抗がん剤調製に努めていきたい。

キーワード：CSTD

診療報酬

演題名：32 字/60 字以内

要旨本文：714 字/400 字以上 800 字以内

総文字数：844 字/500 字以上 950 字以内